

MAB 計画 50 周年
1971 年～2021 年 ユネスコ
「格言のタペストリー」プログラムの提案
生物圏保護区スペインネットワーク

「人は、いつの時代も自然と切り離せない関係にあり、今日、我々はかつてないほど、この繋がりの強い世界にいるが、だからといって公平とは言えない。より多くの物を消費・蓄積しようとする願望は、生命の織り成すタペストリーとの完全な関係性を享受する普遍的な権利を征するものである。なぜなら、物理学と生物学の法則に従えば、タペストリーのある部分が食い尽くされてしまうと、必然的に別の部分にも穴が開いてしまうのである。環境と地球規模での不公平さが増々進行していく中、穴は増える一方で、非常に悪化している。残された時間は僅かであり、とても難しいことではあるが、このタペストリーを織り直し、そこに我々自身を織り込んでいく時間はまだある。1本1本の纖維は切れやすいが、タペストリー全体としては、その多くの纖維が織り成された結果、強靭なものとなる。私はこの賞を1人1人の全ての優しい人々に捧げます。地球上の生命というタペストリーの存続は、彼らの愛情に満ちた闘いにかかるており、これからもかかっていくのである。」

サンドラ・ミルナ・ディアス：2019 年 アストュリアス王女賞

50 年を経て、MAB 計画の領域で知恵を探し出す... 我々は生物圏である

ユネスコの Man and the Biosphere 「人間と生物圏（英語の頭文字で MAB）計画」は、全ての人間社会が要する自然との結び付きの必要性を検証し、再構築するために生まれた。その計画の名前そのものが、「人間」と「生物圏」という連合接続詞を使うことで解決策を示している。一方、「開発」か「自然」という間違ったジレンマは、問題だらけの人類の未来に繋がるものであり、現在我々が直面している問題でもある。そして、50 年後の子供たちの未来にも直面する問題であろうと推測する。

西洋文化が地球を植民地化し、テクノロジーへの信仰を広げた。

この 4 世紀の間、無限の発展へと向かう科学、技術革新、文化的創造性は、大西洋を中心に回っていたように思われる。大西洋を横断することにより、最も小さく、大陸の断片的な様々文化は、まずアメリカ大陸の植民地化を支持することにより、ヨーロッパ人の行動範囲を初めて拡大することとなった。3 世紀後、北アメリカ大陸では、グローバル展開し、継続的に拡大するビジネス文化が育まれた。まるで世界が限界を無限に広げられるかのように、まずはインドを目指したことで、新大陸を発見し、地球の大きさに対する驚きを再現していた。

それは、鉱物の必要性、生態系への影響、そこに派生する文化的な変化などを全く考慮せずに、新たな技術開発、新たなビジネス利益、新たなプロメテウスの世界を求めて、今日でも続いている熱狂的な蜃気楼のようなものであった。つまり、生物圏の複雑さが本来持っている特性や、我々人間と生物圏との相互作用の複雑さを考慮せずにしてきたのである。絶え間

なく続く目新しさへの追求は、未来の海を横断する探検や地図にはない未知の大陸の探求へと変化する。

複雑さは、我々がその知性を測る鏡である。

島の文化、先住民の文化、限界を自覚する社会

フランスの学者、ブルーノ・ラトュールは、ガリレオ・ガリレイがベネチアの潟（ラグーン）で、最初の望遠鏡を使い、船上から近くの星空を見上げた時の様子を、適切な視覚的比喩を用いて回想している。その力学が、我々の地球とどのような共通点を持っているかを考え、見つけ出すことにより、ヨーロッパの科学的な世界の探求と並行して行われた科学と近代性の第一歩に貢献したのである。

ラトュールは、今日、科学は焦点を変えて、手段と視線を我々の地球へ向け、近隣の同じような天体とは全く異なる方法による居住可能な生命現象について自問しなければいけないと結論づけている。一体誰がこの地球を居住可能にしているのか？

同様に、各保護区の各文化にはそれぞれの特徴があり、これらの共通点は、現在の我々の自然に対する無知を明確にするために不可欠かもしれない。MAB計画50周年記念において、我々は地球上で最も優れた自然地域である生物圏保護区と共に土着の文化について学ぶことを提案する。

特に、ユネスコによって保護区に指定された幾つかの島では、自らを制限し、開発モデルを守るために素晴らしい例が見られる。彼らの文化は、その地元の自然条件に深く関わっているため、時には自分たちの境界線にインスピレーションを見つけることもある。それらを独自性と認識し、自らのアイデンティティに取り入れることを選択している。

また、全ての生物圏保護区には、生態系が指定要件に含まれており、生物多様性の増加や、社会生活を可能にする自然資源の維持のために適切な人間の文化習慣を維持している。そのような習慣は普通、何世代にもわたる試行錯誤の結果生まれたものであり、何故そのような方法が定着しているのかは、今では分からぬかもしれない。だからこそ、土着の言葉に込められた知恵を分析する必要がある。なぜなら、そこには時には覚えていないが、蓄積された知識が表現されているからである。あるいは、土着の本質的な語彙を十分に翻訳できないまま、大都会の文化として終わってしまうのかもしれない。

このように、生物圏保護区の社会には、文化的な知識と互いの関わり方があることが分かる。そして、自分たちを取り巻く自然と共に、共通の歴史、経済的・政治的な決定、対立や協力の結果なのである。ここで取り上げられているのは、社会的分類学を数値化し、再構築することではなく、自然との関係性において、社会の内部で何が本当に危機に瀕しているのかを可視化し、質的な研究に頼ることである。

言葉や格言は、その意味や感情を含め、その土地に住む人々の社会的描写を知るために開かれた窓である。どのように生き、どう解釈し、どう苦しみ、どう楽しんでいるのか…。このようにして、自分たちの経験を、自分たちの論考を通じて他の運営団体に伝えることができるるのである。

言葉のタペストリーについて語る→格言のタペストリー、人間と自然との繋がり



unesco

Red Española de
Reservas de la Biosfera

**CONSEJO DE GESTORES DE
RESERVAS DE LA BIOSFERA ESPAÑOLAS**
Órgano asesor del Comité Español del Programa MaB de la UNESCO

この21世紀において、我々がどのようにここまで至ったのか、それを深く調査する価値はある。西洋文化で何かが失われてしまった。無制限な欲望や無限の拡大が実現不可能であることを認識させない何かがある。そして、その何かは、人間が自然に関して自分たちの置かれている立場を理解し、生物圏への関与や他者への依存を無視する姿勢と関係している。

グアテマラ先住民のリーダーであるロリータ・チャベスは、2019年にランサロー島で主催されたセサル・マンリケ生誕100周年記念式典「人新世と向き合う」の講義の中でそれについて延べ、アビヤ・ヤラの先住民文化についても次のように語った。彼らの中では、今でもなお人類社会が母なる大地とは切っても切れない関係にあると日常的に感じられている。世界の全ての先住民文化において、宇宙、惑星、人間と人間以外の生命、そして物理現象との関係性は認識されている。

もし、西洋社会が世界的な拡大において何かを失ったならば、我々は今日の大都市の文明の中で言葉を通して、人間と自然の間の関係性において鍵となる言葉や文章を探すことを探案する。時に、それらの言葉は現代まで残存している過去の痕跡であり、また新旧の関係性を語らずにはおけない新しい言葉となるだろう。

この開かれた協力的な提案の本質は、次のページに添付されており、ランサロー島生物圏保護区の科学閣議の承認により始まり、スペインMAB計画委員会に送るために全てのスペインの生物圏保護区と科学審議会の支持を得た。もし、委員会の関心を引いたならば、ユネスコへ提出し、そこからまた生物圏保護区の世界ネットワークへと提出する予定である。そのため、2025年に中国で開催される第5回生物圏保護区世界大会の機会を生かすべきである。

2025年の提案

「格言のタペストリー」

我々はユネスコに対し、生物圏保護区世界ネットワークのための「格言のタペストリー」の発案を提示する。それは、この世界的ネットワークに属す地域社会で話されている現地語から、人間と自然との繋がりを再認識できる言葉、格言、ことわざ、なぞなぞ、祈り、恋愛表現の言葉などを選ぶためである。

「格言のタペストリー」プログラムが求めるのは次の要素である。

- 自然の境界
- エコ関連
- 社会における人間 我々は自然の一部で、生物圏である。

西洋で見捨てられている言葉の1つは、「ガイア」である。MAB計画が創設された同じ頃に、西洋の科学的発展からJ.ラブロックとL.マーギュリスという科学者は、ギリシャ神話の女神ガイアの名前を見つけるのに25世紀も遡らなければならなかつた。ガイアという言葉は、ガイア仮説を示す言葉であり、今では科学理論となっている。この仮説では、全てのものが、全てのものと関係していることを示す明らかな兆候があり、この地球を居住可能にしている網の目の組織のようなものは、非常に複雑で、システム的に統合されたレベルを持ち、我々の活動や発展において、より大きな謙虚さと慎重さをもたらすものであろうとしている。

2023年9月・生物圏保護区スペインネットワーク

「格言のタペストリー」プログラムは、持続可能な発展を可能にする軽視されてきた知識を広めるために、2024年9月にスペイン生物圏保護区の管理者協議会により承認された。

その目的は、生物圏保護区スペインネットワークの生活圏保護区に住むコミュニティーで使用されている/覚えられている格言を識別し、ユネスコが指定する「国際生物圏保護区デー」で発表することである。

2023年から生物圏保護区スペインネットワークの研究グループは、ランサローテ生物圏保護区管理者であるアキリーノ・ミゲレス・ロペス氏の調整と指揮のもと、プログラムの進捗状況をチェックするために、定期的に会合を開き、この発案について議論している。

このプログラムは、中国の杭州で開催される第5回生物圏保護区世界大会でスペインネットワークとスペインが参加しているテーマのネットワークの技術事務局により発表される予定である。

- 島・沿岸部 生物圏保護区世界ネットワーク
- 山岳部 生物圏保護区世界ネットワーク

(杭州 2025 「格言のタペストリー」提案書の翻訳者 : 今野寿恵
2025年7月)
(Traducido por Hisae Imano en Japonés)